

誰も見たことのない世界を生きる子どもたちのために

細田 真由美

平成時代は、グローバル化の進展とともにあった。日本と世界を隔てるものは小さくなり、人やモノ、情報が軽やかに海を越え行き来した。ポスト平成の「日本」と「日本人」はどこに向かっていくのだろうか。誰も見たことのない世界を生きる子どもたちに、私たちは、何を伝えていったらよいのだろうか。

1 誰かの為に生きてこそ、人生には価値がある

1978年、当時19歳の私は、International House という留学生専用のドミトリー(学生寮)で、シャンプーというイラン人留学生とルームシェアして暮らしていた。

高校3年の大学受験の直前に父が急逝^{きゅうせい}し、受験をしないまま浪人生活に入ってしまった私は、自分が何者にもなれないのではないかという不安でいっぱいだった。そんな私に、母が留学を勧めてくれた。そして、単身アメリカ合衆国に渡り、留学生活が始まった。

宗教、文化、生活習慣の全く違うルームメイトと一緒に、アメリカの文化と語学を学びながら、お互いを理解し尊重し合って生活していく毎日は、とても刺激的だった。彼女との生活が始まってまだ日も浅いある日のことだった。一緒に夕食の準備をしていた時、学生寮の共同キッチンの壁にこんな落書きを見つけた。

Life isn't worth living, unless it is lived for someone else. 「誰かの為に生きてこそ、人生には価値がある。」

誰の言葉かはわからないけれど(後にアインシュタインの言葉だということがわかったが…)、未熟な日本人とイラン人は、西洋文化の持つ懐の深さに魅了され、これから本格化する留学生活に期待で胸が躍った。

シャンプーはムスリム(イスラム教徒)であるから、一日に5回礼拝をする。メッカのカーバ神殿の方を向いてお祈りをするのである。礼拝は、彼女の生活の一部だった。ラマダンという断食月がある。しかし、1ヶ月間完全に絶食するわけではなく、日没から日の出までの間に一日分の食事を摂っていた。普段よりも水分が多いおかゆみたいなものを食べていた。

シャンプーと私は、お互いの生活や文化についてよく話し合った。一緒に生活するためには、互いの価値観を知り認めることが必要だった。半年ほど経った頃、シャンプーは私にこんなことを言った。「イスラム圏の人々は、よく“もつとも敬虔^{けいけん}なムスリムは日本人だ”と言っているが、真由美と暮らしてみて、私もそうだと思う。なぜなら、家族を大切に作る、ルールを守る、身の回りをきれいにする、人との争いを好まない。もちろん豚肉を食べるとか、ヘジャブを被らないとか表面的な違いはあるが、本質的なところで日本人とムスリムは、親和性が

あると思う。」と。

確かに、私たちは、互いが気持ちよく暮らすためのルールを決め大切にした。それぞれ離れて暮らしている家族のことをよく話した。お互いにおせっかいなくらい面倒見の良いところがあり、とにかく気が合った。

しかし、イラン革命が勃発、そしてアメリカ大使館人質事件などが起こり二国間の関係が悪化した1979年、シャンプーは、帰国を余儀なくされた。私たちの二人三脚の生活は、世界情勢に翻弄^{ほんろう}されあえなく終わってしまったのである。

10代の終わりの多感な私は、アメリカ合衆国の世界での立ち位置、顕在化している人種の問題や貧富の差という現実や文化や宗教の持つ複雑さについて考えさせられた。そして、自分自身が世界的な視野で物事を捉えられるようにならなければと強く思った。

今、世界を見渡してみると、私が39年前に憂えた世界の課題は一向に解決せず、むしろ地域紛争、環境破壊、貧困という問題が一気に吹き出し、より困難な時代を迎えてしまったと言わざるを得ない。では、課題山積のこの世界で、私たちはどのように行動したらよいだろうか。その問いへの答えの一つとして、Life isn't worth living, unless it is lived for someone else.「誰かの為に生きてこそ、人生には価値がある。」という、学生寮のキッチン^の壁に書かれていたあの落書きが、私の脳裏に鮮明に蘇った。

シャンプーの帰国後、しばらくして、私を留学へと背中を押してくれた母が末期癌^{がん}であることがわかり、私自身も帰国することとなった。その後、看病の甲斐なく母はこの世を去ってしまったが、母のおかげで勇気を持って踏み出した留学経験が、今の私の基礎を作ったといっても過言ではない。

2 よりよい世界を築くことに貢献する人

1年余りのアメリカでの生活で多くの方々にお世話になったことに感謝し、私は、帰国後、国際交流に貢献したいと考え日本に來ている留学生のお世話をするボランティアを始めた。アメリカでの経験もあり、他国の人と暮らすことに慣れていた私は、ホームステイ先が見つからないセルビア人の大学生が困っていることを知り、彼女と我が家で一緒に暮らすことにした。ディアナという目の覚めるような美人で、一緒に歩いているとたいていの男性が振り返るほどだった。

「女性の私でも、惚れ惚れするほど美人ね。」と彼女に言ったことがある。すると、彼女は「民族が複雑に入り組み、紛争が繰り返されてきたバルカン半島の歴史のおかげかしら。」と、シニカルに言っただけだ。

バルカン半島は、ローマ帝国、ビザンツ帝国、オスマン帝国といった大帝国の支配が続いたが、その間も、ラテン系、ゲルマン系、スラブ系、トルコ系などの諸民族が諸国家を建設し、民族対立・宗教対立が後を絶たなかった。「ヨーロッパの火薬庫」とまで言われ、第一次世界大戦の引き金となった地域でもある。その歴史により、バルカン半島には5つの民

族、4つの言語、3つの宗教が入り乱れている。それがかつてユーゴスラビアという1つの国家としてどうにか収まっていたのは、チト大統領というカリスマによる強いリーダーシップのおかげだった。1980年に彼が亡くなると、バルカン半島は、再び血で血を洗う民族紛争が長く続いた。私が、ディアナと一緒に暮らしていた1992年当時は、彼女の祖国はセルビア共和国という体制はとっていたが、政情は不安定だった。彼女はいつも、諸民族がそれぞれを認め合い緩やかな連携をもっていくために自分に何ができるかと考えていた。しかし、ディアナの帰国後も、彼の地には幾多の困難が待ち受けていた。残念ながら私は、そのことを遠い国の紛争として受け止めるしかなかった。

アメリカでのルームメイトだったイラン人のシャンパー、そして、日本で一緒に暮らしたセルビア人のディアナ。二人の友人との出会いは、私によりよい世界を構築するためには、多様性を理解し受け入れそして繋いでいくことが大切であること、そして、それは決して簡単なことではないと教えてくれた。

その後20年以上にわたって英語の教員として教壇に立ってきた私は、常に「英語を道具として世界を見よう。そして、よりよい世界を築くために自分は何ができるか考えてほしい。」と語ってきた。

さいたま市立大宮北高等学校の校長となった私は、高校生という多感な年代で世界を見て体験することの大切さを語り続け、修学旅行先をシンガポール・マレーシアとした。

シンガポールでは、多文化共生の中で育ち様々な価値観を持った現地の大学生との交流、そしてマレーシアでは、現地の高校と学校交流を行った。マレーシアの交流校は、生徒と先生方の9割以上がムスリムだった。民族音楽で大歓迎してくれた教員と生徒との穏やかな文化交流を経験した後、ある生徒がこんな感想を述べていた。

「今、国際情勢を震撼させているいわゆる“イスラム国”など、宗教や民族紛争のニュースを見聞きするたびに、イスラム世界への偏見が増していた。しかし、実際に交流したムスリムであるマレーシアの高校生は、皆優しく素朴で思いやり溢れる人々だった。スポーツや音楽を楽しみ、SNSでコミュニケーションを取り、将来の自分に希望を持ったり、悩んだり、自分たちと同じ高校生だった。だから、自分たちの世代が力を合わせ、お互いを理解し認め尊重し合える世界を構築していかなければならないと痛感した。」と。

大宮北高校では、理数科の生徒諸君が台湾の高校生と共同研究するサイエンス研修も実施した。なぜ台湾という地域を選んだのか。理由は二つある。一つは、台湾がテクノロジーの分野でアジアをリードしているからである。もう一つは、日本との歴史的な関わりについて生徒たちに知ってもらいたかったからである。

東日本大震災後、台湾から総額250億円を超える民間義捐金を贈っていただいた。この金額は、ダントツで世界最高額である。そして、台湾人が世界で一番親しみを感じる国は、1位日本74%2位アメリカ4%であるという事実。私は、なぜ、かつて日本の植民地であった台湾がこれほどまで親日的なのかとても不思議に思っていたが、台湾や台湾の人々を知ると謎が解けた。

日本は、日清戦争の結果、台湾を占領した。世界で最後に帝国主義になった日本が、最初に手に入れた植民地をどのように統治するかが議論になった。それまでオランダや清朝に統治されていたが、未開の土地のまま放置されていた台湾に、後藤新平という政治家が手腕をふるい台湾の近代化に取り組んだ。その手法は、優秀な人材を投じ、台湾のインフラを整えるというやり方だった。その一人に八田與一^{はつたよいち}という日本人技師がいた。彼は、台湾南部の不毛の大地を潤す烏山頭^{うざんとう}ダムという東洋一のダムを建築した。そしてわずか3年で台湾最大の穀倉地帯へ変え、困窮を極めていた農民に豊かな生活を与えたという偉大な日本人である。完成後80年以上が経過する現在でも、台南の人々に豊かな水資源を提供し続けている。

戦前帝国主義国家であった日本が行った負の部分ばかりがクローズアップされる歴史教育にさらされてきた私は、八田與一のような優秀で心豊かな日本人が、現地の人々のために偉大な業績を残したこと、そして長い歴史を経てなお台湾の人々に尊敬され続けていることを知り、日本人として誇りに思った。

私は、歴史を学ぶ意義は、自分がなぜこの場所でこうやって生きているのか、その座標を知ることにあると考える。自虐的にも傲慢^{ごうまん}にもならず、まずは客観的事実の積み重ねを知ることが大切である。その上で、未来へどのように繋いでいくかを自分で判断することだと常々思っている。

平和を希求するのは自明のこと。では、グローバル社会を生きる我々は、どのように地球規模での平和を求めるべきか。

冷戦下の1957年、スエズ危機解決に尽力してノーベル平和賞を受賞したカナダの政治家、ピアソンは、「互いを知らず、理解しあえないなら、どこに平和があるのか。互いに切り離され、相手に学ぶことも許されないなら、どうやって共存できるのか。対話とふれあいの妨げになるカーテンを、さあ脇に捨てよう。」という言葉を残している。60年の時を超えてもう一度この言葉を真摯に受け止め、考え行動しいろいろな知恵を出し合って前進していかなければならない。

3 誰も見たことのない世界を生きる子どもたちのために

ニューヨーク州立大学キャシー・デビッドソン教授の発表した「今年、アメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今は存在しない職業に就くだろう。」という論文に、私たちは衝撃を受けた。2011年のことである。その後も、今後10年から20年程度で半数近くの仕事が自動化される可能性が高い(オックスフォード大学マイケル・オズボーン准教授)や、2045年にはAI(人工知能)が人類を超える「シンギュラリティ」に達するであろうという未来予測が、次から次へと発表されている。

また、ベストセラーになったリンダ・グラットン氏らが著した『LIFE SHIFT — 100年時代の人生戦略』(東洋経済)によれば、2007年に日本に生まれた子どもの半数は、107歳まで

生きると予想される。その結果、「教育→仕事→引退」の順に同世代が一斉行進する時代は終わり、多くの人が転身を重ね、複数のキャリアを経験するマルチステージの人生へとシフトすると言う。ロールモデルがない中、生き方を模索しなければならない人生100年時代がやってきそうである。

このような、誰も見たことのない世界を生きる子どもたちに必要な力とはどのような力なのだろうか。

OECDの2030年の教育を構想するプロジェクトEducation2030で、一つの明確な考え方が示されている。その議論では、21世紀に必要とされる最も大切なコンピテンシー(力)は、「協働的な問題解決能力」であり、また単なるスキル(知識や技能)のみではなく、キャラクター(人格)も大切にされなければならない。さらに、地球規模で課題解決ができる「グローバル・コンピテンス」を持った人材育成の重要性も強調されている。

私はこのOECDの報告書を手にし、さいたま市教育委員会が掲げている「子どもたちの未来のためのPLAN THE NEXT 3つのGで日本一の教育都市へ」が、Education2030に合致する考え方であると意を強くした。

3つのGのうち、第一のGは、Grit(グリット)「やり抜く力で真の学力を育成すること」。子どもたちの学ぶ意欲や自己肯定感、つまり人格とも密接につながる非認知能力を高めるとともに、主体的で対話的な質の高い授業を展開し真の学力を育成する。

第二のGは、Growth(グロウス)「一人ひとりの成長を支え、生涯学び続ける力を育成すること」。本市の強みである、学校・家庭・地域・行政による確かな教育力を一層高め、小・中・高等・特別支援学校12年間の「学びの連続性」を持った指導を行う。

第三のGは、Global(グローバル)「国際社会で活躍できる人材を育成すること」。激動する世界を舞台に挑戦する主体性と創造性、豊かな人間性を養うとともに、価値観の異なる人々と関わり、多様性を受け入れ活用できる力を育成する。

私は、不確実性を増す未来を生きる子どもたちに、生涯にわたって質の高い学びを重ね、自分の頭で考え抜いて、「新しい価値」を見つけられる、知的にタフな人間になってほしいと願ってやまない。多くの手ごわい課題を抱えている我が国が、これから迎える変化と混乱の時代をどう乗り切っていくか、そしてよりよい世界を築くためにどのように貢献するか、それは子どもたちがどのような未来を創っていこうと志すかにかかっている。

子どもたちよ、高々とした心を持ち生きていこう！

私たちも、君たちのために日本一の教育を実践する！

[2018.10.12 掲載]